

第3節 絹さん人形に見る農家の暮らし

文化的景観は、そこに住む人々による営みの歴史的蓄積の上に成り立つ。緒方の景観形成には、その中心を流れる大野川の支流である緒方川が大きな役割を果たしてきた。原尻の滝より下流は、緒方川は大地を深く削って流れていく。そのため、緒方盆地の灌漑用水の取水口は原尻の滝の上流に設けざるを得なかった。左岸には緒方下井路と緒方上井路が、右岸には柚木井路などが設けられ、緒方盆地の水田を潤し、「緒方五千石」と呼ばれる美田を創り出してきた。このような景観を維持してきた水田稲作を中心とした伝統的な生業を振り返ってみたい。ただし、このような「技」は、文字だけではイメージしにくい。その点、緒方には「絹さん人形」と呼ばれている人形群が残されている。生産生業から、衣食住、冠婚葬祭や子供の遊びまで、後藤絹さんはたくさんの人形を創り出してきた。大正末期から高度成長期の始まる昭和40年(1965)頃までの緒方の人々の暮らしが、手に取るように見えてくる。ここでは景観形成とその維持に大きな役割を果たしてきた稲作を中心とした生業について、絹さん人形を見てゆきながら語っていききたい。

後藤絹さんは大正8年(1919)1月16日生まれ、豊後大野市緒方町小野に居住し、平成19年(2007)に89歳で永眠。絹さんは幼い頃には学校の先生になるのが夢で、勉強熱心な人だったという。73歳(平成4年[1992])頃から人形を作り始め、85歳(平成16年[2004])頃までの約12年間に300点を超える作品を制作された。少女時代の大正期から始まり、戦前、戦中、戦後の農家の暮らしを、自らの体験や思い出を元に見事に造形化している。

小野という地区は、地名表記をすると、豊後大野市緒方町小野区(鮎川字小野)となり、緒方川の右岸に位置する。緒方の中心地から南下して新緒方橋を渡り、小高い丘の上に至ると、そこが小野集落である。

後藤家では2町5反の水田を耕して稲を育てていたという。絹さんが農家の主婦として働いていた当時の農業は、現在と違って機械化はされておらず、すべて人と牛馬の力だけで行うきびしい労働だった。そのような中での人と人とのこまやかな心の交流を見事に表現している。1年間の中で水田では稲作と麦作とを交互に行い、一年中休むこともなく食糧生産が行われていた。当時の農業が、灌漑のための水路の維持、運搬や農耕用の役畜としての牛馬の飼育、牛馬の糞尿による堆肥製造などを伴い、かつての農家は完結した循環型の生産体系を持っていたことを、絹さんは人形たちによって私たちに伝えてくれる。約100点ほどの絹さん人形を用いて、緒方盆地における稲作や麦作中心とした農業の様子を見ていく。

1 農家の一年(既と循環型農業)

①水田

稲が良く育つ田をマエダ(前田)、あるいはイトウダ(一等田)、灌漑の水が行き届かないために実入りの良くない田をヒヤケダ(日焼け田)と呼んだ。日当たりの悪い水田をカゲタ(陰田)、山付きの水田をヤマダ(山田)といい、いずれも稲の出来が悪く、裏作はできなかった。湿田をドブタとかコタと言い、冬場でも水気が抜けないので、裏作も出来なかった。ただし、乾田よりも米の収穫量は少ないが、早魃時でも収穫することできた。麦の裏作できない水田をハルタ(墾田か?)とかサコタ(迫田)と呼ぶこともあった。

②早春の田圃

春の訪れと共にレンゲ草が水田一面に赤紫色の可憐な花をいっぱい咲かせる。レンゲ草を刈るのは4月初旬で、花がしぼむ頃。刈り取ったレンゲ草は牛の餌にした。この「田圃に播いた紫雲（れんげ）切り」では、幼子に乳を与えている人形は絹さん自身がモデルだという。おばあさんが幼子を手連れてきてくれたので、レンゲ草に覆われた田圃で授乳することになり、日傘を差し掛けてくれたおばあさんも一緒に人形にしたというのである。

レンゲ草は前年秋に種を播き、稲を植える前の早春の水田で育てると、緑肥といって肥料になる。レンゲ草の根のこぶ（根粒）に住む根粒菌は空気中の窒素を肥料にする力があり、そのためレンゲ草を鋤き込むと、腐葉土のように分解されて土中の肥料になる。



写真1 レンゲ草切り

③荒起こし

桜の花が咲き終わった4月中頃に、「荒起こし」といって、硬くなった水田の土壌を、牛にコガラ（犁）を牽かせて耕起した。1日で1反（約990㎡）から1反半程度を耕したもので、荒起こしは主に男の仕事であった。



写真2 牛にコガラ（犁）を曳かせて荒起こし

④井手普請

現在は4月下旬にイゼブシン（井手普請）といって灌漑用水路の清掃や補修を行う。昔は、3月の終わり頃に用水路の修繕をした。緒方の幹線水路はタタキ（三和土）で固めて漏水を防いでいたのである。三和土は赤土に消石灰と少量のニガリ（塩化マグネシウム）を混ぜて練ったもので、良く練って叩き締めると硬化する特性がある。

井手の世話人が日時や補修の場所を決め、その井手から水を供給される水田の持ち主たちが集まって三和土を練って補修作業をしたのである。明治末期から大正期にセメントが入手できるようになると、水路全体をコンクリートで修築するようになり、大正10年（1915）頃には大勢の人手による井手普請は影を潜めるようになった。

このような大規模な伝統的な井手普請のことを「千本搗き」といったが、緒方では「千盆搗き」と表記した。補修現場近くに広げた赤土を「盆」と呼んでいたからである。盆は高さ7寸ほど（約20cm厚）、幅約5尺（1.5m）、長さは5間（9m）から10間（18m）ほどあった。千盆搗きの前に、まず盆に打ち水をしておいた。

井手普請では組織的に作業をした。指揮者である「木遣り」は陣笠を被り、陣羽織を来て、白緒の草履を履き、五色の房のついた采配を持つ。「搗き手」たちは若者たちで、頭には鉢巻を締め、紺の袴纏に紺の股引姿で、足半を履いていた。

木遣りは作業工程ごとに違う「木遣り唄」を歌って作業の指示と景気づけをした。まず、木遣

りの「呼び出し」という唄で、搗き手たちは素足で盆の上に登って2列に並ぶ。拍子木の合図があり、「耳打ち」で平鍬で赤土を切り刻み、「二つ拍子」で足裏で捻るように赤土を練り、「車搗き」では円陣を組んで土を練った。「肩引き」では優美な踊りの所作を真似て土を練り、最後の「辻巻き」では、盆の真ん中あたりで、搗き手たちは木遣りを胴上げして、「えーい、えーい」と掛け声をかけながら盆を練り上げた。千本搗きは根気のいる単純な重労働であるが、木遣り唄によって一糸乱れぬ作業をして効率を上げていたのである。

そして練り上がった三和土をモッコで運び、漏水箇所や軟弱部分に三和土を打ち付けていったのである。このような井手普請は何日もかかり、若い娘たちが大勢見物に来たので、搗き手の若者たちは張り切って千盆搗きをしたという。また、勤務評定が行われたことも、搗き手のヤル気を引き出したものであった。井手普請の最終日には「乱打ち」をした。作業態度の評価によって、最高の甲札、そして二番札、三番札、四番札、最下位の五番札を、それぞれ若者たちに配られた。米一升10銭の頃、甲札は18銭、五番札は2銭であったという。

昭和45年(1970)に千盆搗保存会が結成され、昭和51年(1976)には大分県の選択無形民俗文化財になり、秋の緒方五千石祭りで千盆搗きが舞と踊りを披露している。また、千盆搗きの唄は、「地固めができた」という意味で、今でも新築棟上げや結婚式などで祝い唄として歌われている。

絹さんが生まれたのは大正8年なので、この伝統的な千盆搗きを実際に見たことはないと思われる。本来男だけの作業であり、女性たちが参加していることから、保存会による千盆搗きの様子を人形にしたものであろう。

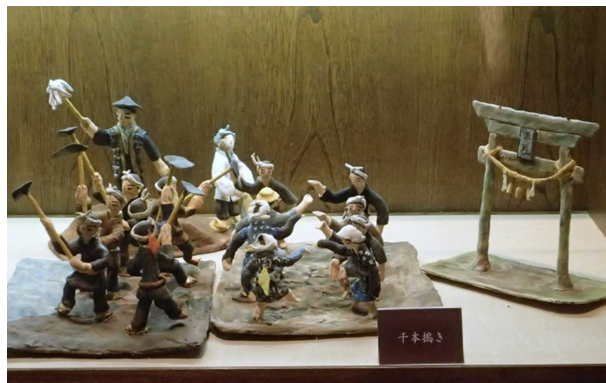


写真3 千盆搗き

⑤道普請

水田に水を入れる前、それぞれの地区の人々が総出で農繁期の直前に道普請を行う。農作業などで用いる農道や山道の草刈りや清掃、修理をするのである。



写真4 道普請(リヤカーで土を運んで、道路の修理)

⑥苗代作り

ノーシロ(苗代)作りは八十八夜(5月初頭)前後であった。田植機は1970年代から普及し、そのため現代では育苗箱で育てた苗を植えるようになっている。しかし、伝統的な稲作では苗代に種籾を蒔いて苗を育てたものであった。水利が良く、水路から水を引きやすい土の肥えた水田を苗代に用いた。苗代田は狭いので、平鍬で耕してから水を注ぎ、エブリ(柄振り)で均し、一旦水を干してから種蒔きをした。種籾は播種前に川や池、桶の水に約10日間浸けて発芽を促した。流水だと酸素の供給には問題は無いが、桶の場合は頻繁に水替えする必要がある。

播種して40日から45日経つと、苗として使えるまでに育った。学校帰りの子供たちにとって

苗代田は初夏の遊び場として最高だった。水棲昆虫やトンボ、カエルなど水辺の生き物たちが沢山いたのである。



写真5 鋤で耕す



写真6 エブリで均す

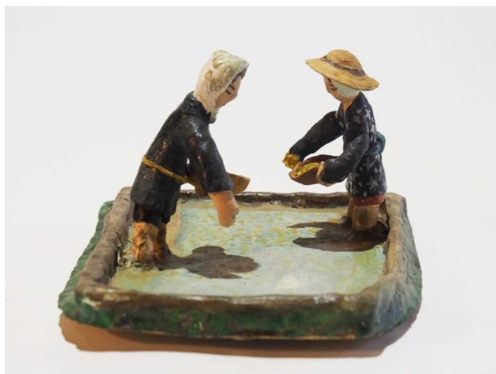


写真7 種蒔き（播種）



写真8 苗代で遊ぶ子供たち

⑦荒代取りと施肥

苗代作りが終わると、田に水を注入してアラシロトリ（荒代取り）をした。これは主に男の仕事であった。牛にモーガ（馬鋤）を牽かせて縦横3回ほど搔くと、「田がなれる」といって土壌はどろどろになる。荒代取りが終わると、クロキリ（畔切り）をした。低く広がった畔を平鋤で削って元のように細くするのである。そして、アゼヌリ（畔塗り）といって平鋤で泥を畔に塗りつけて畔の形を整えた。次に「ムクリ」といって堆肥を水田に入れ、2～3尺（約60～90cm）間隔で牛にコガラ（犁）を牽かせて堆肥を土壌に混ぜ込んだ。天秤棒で堆肥を担いで田に持って行った。人糞尿を発酵させて肥料にして、コエオケ（肥桶）に入れて天秤棒で担いで田に持って行き、撒くこともした。



写真9 夏の田鋤



写真10 荒代取りでは馬鋤で搔く



写真 11 肥桶に入れた下肥を運ぶ



写真 12 畦切りと畦塗り



写真 13 牛に負わせて下肥運び

⑧本代掻き

6月中頃の梅雨時にホンシロカキ（本代掻き）をした。田植え前の田ごしらえで、牛に馬鍬を牽かせて田を掻いたのである。雨の中での作業が多く、晴れたら晴れたで、太陽の直射がひどいため、蓑笠は欠かせなかった。

⑨苗取りと代掻き

田植えの日の早朝、苗取り（苗引きともいう）をした。苗代の苗を抜いて直径7～8cmほどにまとめて藁で縛って苗束にした。苗束を苗籠に載せて運んだ。苗籠は荒い籠目の浅い竹籠で、耐水性の高い棕櫚縄の吊り紐がついていた。これを天秤棒で前後に1籠ずつ吊って苗代田から田植え



写真 14 苗取り



写真 15 夫婦で苗取り

をする水田まで運んだのである。そして、運んだ苗束を水田の片隅の水の中に漬けておく。苗取りをしている間に、男衆が田植えをする水田を牛に馬鋤を牽かせて代掻きをして、柄振りで田をきれいに均して田植えに備えた。

⑩田植え

人形展示のパネル解説に田植えのことを次のように紹介している。「田んぼがレンゲの花に覆われる頃、農家では苗づくりの準備が始まります。井路には水があふれ、田んぼに水を湛えます。そして苗が大きく育つと、田植えが始まります。今は機械で田植えをしますが、親子、兄弟、親戚たちが一列に並んで、小唄を唄いながらにぎやかにひと株ずつ手で植えていく姿は実に美しい光景でした。」

田植えは6月頃に一斉に行われた。共同で田植えを行うこともあり、それぞれの家の田を次々に植えて廻った。テマガイウエ（手間替え植え）とかヨリアイウエ（寄り合い植え）といった。テマガエシ（手間返し）とって、田植えの人手を貸し借りしたのである。

1軒の家で田植えをすることもあった。また、ヒヨウ（日雇）とって、農家ではない人を雇って賃金を払うこともあった。家から田まで距離があるので、お弁当や御茶をいれた薬缶を持って家族揃って田植えに出かけたものだった。まず、田植えでは苗配りといって、男衆が田植えをする人の近くに苗束を投げ込んだものだった。

狭い水田では追い植えといって、植え手は畔に沿って苗を植えていった。そのため、畔が曲がっていると、植えた苗の列も曲がって植えられた。広い田では田植綱を用いて正条植えをした。大正期には田植綱を使うようになった。正条植えをすると、苗の間隔が一定になるので、八反取りなどの除草器を用いることができた。田植綱には苗を植える間隔を示す小さな玉がついており、7寸（約21cm）間隔、8寸（約24cm）間隔の綱があった。田植綱の両端の棒を持って引っ張る2人の男たちをツナヒキ（綱引き）とって。植え手は横に並び、その前に綱引きは田植綱を張った。植え手たちは目印の玉の近くに苗を植え、自分の担当分を植え終わると、屈んだまま後退して、1尺5寸（45cm）下がった所に苗を植えていって後退した。それから、綱引きは田植綱を3尺（約90cm）平行移動した。そして植え手は2列に苗を植えて後退する。これを繰り返して田植をしたのである。1日1人で7畝（約694㎡）から8畝（約793㎡）植えたものであった。田植えでは、苗を植えるのは主に女だったが、男も加わることもあった。男は田植え寸前の代掻きや柄振りによる均しをして、田植綱を引いたり、苗配りをした。



写真16 家族そろって田植えに行く



写真17 追い植えは皆で田植え



写真 18 苗配り



写真 19 夫婦で田植え



写真 20 雨の日も蓑笠姿で田植する



写真 21 田植網を用いた正条植え

家から水田まで距離があるので、お弁当や御茶をいれた薬缶を持って家族揃って田植えに出かけたものであった。

絹さんの書いた「田植えで草原で昼食」は次のような文章である。「田植えの天気の良い時は、野原に出て弁当を食べたりした。たった1時間の昼食時間で、あまり休む暇もなかった。暑い日は木陰に行く時もあったが、雨降りの時は近所の人家を借りて食べた時もあり、今のように車なら帰れたけれど、家で昼食はほとんどない。田ん圃が遠いので、当日弁当を持って行くので、前夜は二、三時間しか女は眠る時間はなかったのです。田植えは1ヵ月くらいかかり、よく続いたものだと思う。終わった日のうれしさは言いようもないほどでした。こんな苦勞が今、楽しい思い出となって良かった。この苦勞を偲びながら、人形の形にどうしてその苦勞を移すかが、私の人形作りの苦勞になって、いろいろの思い出がよみがえってくる。苦勞あって、喜びは大きい。」



写真 22 昼飯運び



写真 23 田植えで草原で昼食

1ヵ月ほどかかる田植えだけでも重労働なのに、農家の女性は昼のお弁当まで用意しなければならず、睡眠時間も少なく、大変きびしい労働だったことが良くわかる。その苦労を人形にどのように表現しようかと思案する絹さんの姿が目に浮かぶようである。

地区総ての田植えが終わると、触れが回ってきて、タウエヨコイとかサナボリといって一斉に田植え休みをした。2、3日家でゆっくりと休養したのである。

⑪草取り

「田んぼが一面、青田の海になる夏。陽射しの強い昼間は手を休めて、昼寝です。」という長いタイトルのパネル解説には「若葉が繁る頃、田んぼは一面、青々とした稲の草いきれに包まれます。日毎に成長する雑草と競争するかのようになり、あちこちの田んぼで草刈りや草取りが始まります。草取りのときにマムシにかまれることもありましたが、生けどりにする機会もあり、軒先でマムシを干したり、マムシ酒を作ったりする光景もときおり見られました。そして暑い夏がやってくると、昼間の時間に田んぼで作業する人影はほとんどなく、「昼よこい」といって昼寝などをして、作業の疲れを癒しました。」と書かれている。しかし、草取り作業は、このような第三者の視点から見たような牧歌的な労働ではなかった。

絹さんの「他の草取り 除草機」には「稲が上部に有り付いて、元がさが終われば、今度は二番取りといって、機械で箱（畝）の中を一步一步をせって歩くのでした。7月の暑い日は、朝から汗びっしょりでした。初めのうちは主人に負けまいとせったのですが、8ヵ月のお腹をかかえた私は、足がお腹につかえて思うように足がかかわされず、きつく、10時頃からはもう倒れそうであった。9月29日には長男が4人目に生まれた。昔は子供が生まれるまでは仕事は休めなかった。今思っても、息の詰まる思いがする。よくこれまで命があったものだと思ふ不思議な気がする。きつかったあの日。」と書かれている。

田植えして約2週間後から田の草取りを始めた。最初の草取りは一番取りとかモトガサとかモトカキ（元掻き）といって、雑草もさほど育っていないので、両手の指で田の表面を掻き混ぜるぐらいだった。雑草が育ってくると、ガンゾメ（雁爪）といって、短い柄に4本から5本程度の湾曲した刃先のついた道具で、雑草を根こそぎ取っていった。一番取りから始まって、三番取りまでの3回程度で済む場合もあったが、多いと6回も草取りすることがあった。二番取りは盆前に取り、最後の草取りをアゲドリ（上げ取り）といった。大正期、正条植えの導入と共に、八反



写真 24 八反取り（除草機）で
田の草取り



写真 25 マムシを捕ったぞ

取りという除草器が用いられるようになった。八反取りは田打ち車ともいい、舟型の鉄枠に回転する刃の突き出た鉄製の筒がついた道具で、長い柄がついているので、立ったまま押してゆくだけで良いので効率が良くなり、屈む必要もなくなって草取りが楽になった。ただ、暑い盛りの作業なので、体はとても辛かった。

⑫虫除け（害虫防除）

稲が次第に育ってくると、ウンカなどの害虫が発生することがあった。昔、虫除けには、鯨油や灯油などの油を用いた。油での虫除けは朝露が乾く前の早朝に行った。竹筒に油を入れて田に播いた。竹筒の底にあけた細い孔に芯を通して油漏れを防ぎ、田の中で芯を引き上げて油を少しずつ垂らして廻った。油は田の水面に薄く広がれば良く、細い棒などを祓うように稲に接触させ、朝露で飛び立てない小さな害虫を水面に叩き落とし、油まみれにして退治したのである。終戦後にBHCを使うようになり、噴霧器を用いて薬剤を散布した。BHCの次にはホリドールという薬剤が普及した。BHCはベンゼンヘキサクロリドという殺虫剤で、毒性が強いため昭和46年(1971)に使用禁止となった。ホリドールは殺虫剤パラチオンのことで、これも昭和46年(1971)に使用禁止となっている。

絹さんの「稲田の防除」には次のように書かれている。「主人55歳、私45歳の頃でした。主人が貧血で倒れ、入院することになり、5月田植え前の一番忙しい時期でしたので、どうなることかと心配したが、心を鬼にしてやらなければと決心した。これまでは主人が命令するままについて行けば良かったので、戸惑うばかりでしたが、舅もいて、長男も役場に勤め始めたばかりでしたので、朝晩は鋤いたりカイしたりして、2町2反なんとか田を植えることができた。あの頃は、米増産運動で共同田植え、共同防除もしていて、農協の方もいつも回ってきて指導してくれ、私も主人に負けないように米を作りたいと、毎日2町2反の田を隈なく廻り、肥料振り、防除水の掛け引きに飛び廻り、夕方から病院に行き、朝4時に帰る。」

夫の突然の入院で、絹さんは好きではない牛にコガラ（犁）やモーガ（馬鍬）を牽かせて、鋤いたりカイ（代掻き）したりしたというのである。田植えや防除もして、追肥では粒状の化学肥料を用い、胸前につけた散布器で肥料を撒いたのである。負けず嫌いな絹さんらしく、なんとかやり遂げたが、女手一人で稲作をするのは大変なことだったに違いない。



写真 26 稲田の防除



写真 27 3人掛かりの稲田の防除

⑬土用干し

今でも、8月の終わる頃に土用干しといって田の水を抜いて乾かす。稲の根を強く張らせて、稲株を丈夫にするためである。

秋の訪れに従って実の入った稲穂は重たげに頭を下げるようになると、雀などが実を食べに来るようになる。農家では稲田に案山子を立てて追い払おうとする。

⑭稲刈りと稲干し

「秋の田んぼは、朝から晩まで大忙し。実りを祝う祭りに、五穀豊穡を祈ります」という題名のパネルの解説文があります。「も



写真 28 秋の田の案山子

みがたわわに実り、田んぼが黄金色に染まると、人々は、稲刈り、乾燥、稲こぎ、袋詰め、出荷と休む間もなく働きます。今のように農機具がなかった昔は、子どもからお年寄りまで一家総出で弁当を持って作業をしていました。作業の役割もちゃんと決められていて、子どもは主にわら運びをしていました。また一年の労が報われるこの時期、五穀豊穡を神々に祈る祭りが行われます。娯楽の少なかった昔、祭りは大人も子どもも待ち遠しく、心躍るものでした。」

稲を刈るには片刃鎌やノコガマ（鋸鎌）を用いた。ジボシ（地干し）といって刈り取った稲を、地面に並べて干したが、畝ごとに刈り取り、その前の畝の稲株の根元近くに、次の畝の稲穂を載せていった。稲穂を地面につかないようにして乾燥しやすくしていたのである。これはハガサネボシ（葉重ね干し）といって、天気にもよるが、3日ぐらい干していたという。稲架を用いた掛け干しは戦後になって普及した。乾いたら田の片隅に稲束を積み上げておき、その場で稲扱きしたり、屋敷に持ち帰って坪（作業用内庭）で稲扱きをした。

昭和40年（1965）頃から農業の機械化が進み、昭和45年（1970）頃に稲刈りにバインダーが導入されるようになり、昭和48年（1973）から49年頃にはコンバインが登場した。また、田植機も1970年代には普及し、稲作は重労働という軛から解放されていった。しかし、それは共同作業の終焉でもあり、地域の人々の結びつきを弱め、家族の結束を緩める原因ともなった。



写真 29 夫婦で稲刈りに行く



写真 30 家族そろって稲刈りに



写真 31 夫婦で稲刈り



写真 32 家族皆で刈った
稲は地干し



写真 33 バインダーでの
稲刈り



写真 34 稲束を掛け干し
稲刈り

⑮稲束を運ぶ

稲束や稲藁を千歯や足踏み脱穀機まで運ぶにはオオコ（負う子）に刺して運ぶ方法があった。絹さんが書いた「おおこ刺し」に次のような稲束の運搬法があったことが書かれている。

「おおこ刺しとは、稲やワラを担ぐ時に、おおこといって竹の棒の両端を研いで作ったもので、この竹の棒を稲に刺して担ぐのです。なかなか要領がいるのです。私はこれがなかなか出来なくて苦労したのです。男の人たちは簡単に手だけで刺して担ぐのですが、力の無い私は稲におおこを刺してもう1羽（束のこと）を担ぐのに、肩に担いでから刺さないと担げないのですが、この写真のように後ろの稲が落ちてきて、前の稲が上がらず、何回も刺し直せば稲の穂はあえて、私

の担いだ跡は真っ黄色に靫があえているのです。余りにも哀しくて、夜こっそり起きて納屋に行き、ワラでおおこ刺しの稽古をしたり、いろいろの稽古をしたものでした。コツがわかれば力の無い私でもうまく出来るようになり、面白くなって、どんどんおおこ刺しをしながら運べるようになる。人並みに出来るようになった喜びは、本当にうれしかったあの頃。」

おおこ（負お子）は真竹の両端を斜めに削ぎ切った長さ5尺（約1.5m）から6尺（約1.8m）の運搬具である。両端を稲束や草束に突き刺して天秤棒のように担ぐのである。絹さんは力が弱くて上手に稲束に刺せなかったのが、一生懸命練習して上達して、とても嬉しかったというのである。努力家の絹さんならではのエピソードである。



写真 35 稲束を縛る



写真 36 おおこで稲束を運ぶ

⑩脱穀

乾燥した稲を乾田で千歯扱きを用いて脱穀した。四角い枠の一方が台となっており、その台に先のとがった薄い鉄製の歯が20本ほど植えられている。この四角い枠を2本の脚をつけて立て、歯の隙間に稲の穂を挟んで引き抜いて靫を落とすのである。足踏み脱穀機は昭和初期頃から普及を始め、遅い所では昭和30年（1955）代になって使い始めた所もある。足踏み脱穀機は、たくさんの逆V字型の歯を植え込んだドラムをペダルを踏んで回転させる道具で、このドラムに稲穂を押し当てて脱穀した。脱穀は田の中や家で行っていた。稲束をオオコで担いだり、牛に負わせて家に持ち帰り、カバナシ（軒下）に積み上げて、真夜中まで千歯扱きをしていたという。田の中でも屋敷の坪でも、千歯や足踏み脱穀機の下に箆を敷いて靫を受けた。なお、足踏み脱穀機は稲藁の破片などが盛大に飛び散るので、脱穀機の周りを箆で覆って使用していた。田で脱穀する時は足踏み脱穀機を担ぎ棒に吊って2人で運んだ。



写真 37 千歯扱きでの脱穀



写真 38 千歯で稲扱き（脱穀）

昔は脱粒性の高い稲の品種が多く、十分に稔ると籾があえやすい。絹さんが稲束におおこを「何回も刺し直せば稲の穂はあえて、私の担いだ跡は真っ黄色に籾があえているのです」と記したのは、まだ、脱粒性のある稲を栽培していたためである。脱粒性の高い稲を栽培していた頃、斗枘や稲打ち石、それに麦打ち台に稲や麦の穂を打ち付けて脱穀していた。麦打ち台は縁台のような形状で、上部に割り竹を並べた道具である。



写真 39 足踏み脱穀機を運ぶ



写真 40 足踏み脱穀機での脱穀

⑰稲収納

籾摺りした籾は、トウミ（唐箕）やカラウチワ（唐団扇）、箕を用いて、実のあまり入っていない「しいら」や籾殻と籾を分けていた。これは風力を利用すると、重い籾は手前に落ち、軽いしいらや籾殻は吹き飛ぶからで、これを風力選といった。唐団扇は硬い牛革などで作られた大型の団扇である。風力選した籾はフルイ（篩）や弁選機に通して、粒の大きな籾だけを選別した。弁選機とはセンゴクトオシ（千石通し）のことで、斜めになった長い篩状の道具で、一番上に籾を注ぎ込みやすいように四角い漏斗状の口があった。できあがった籾をトマス（斗枘）を用いて俵に詰めた。タケジョウゴ（竹漏斗）といって、竹編組品の漏斗を用いて俵詰めをした。



写真 41 唐箕で選別



写真 42 唐団扇と箕で選別

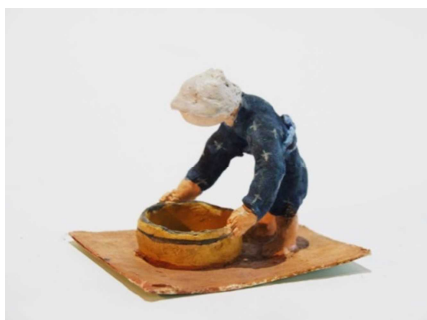


写真 43 篩で選別



写真 44 篩でふるう

家に持ち帰った俵は、カベナシ（壁無し＝軒下）や土間にリンといって丸太を2本並べ、その上に積み上げて保管し、粃摺りして再び俵に詰めて出荷した。大きなチキリ（竿秤）で玄米の入った俵の重さを量って、俵の口を閉じた。また、種粃や自家消費用の粃は、俵に詰めたまま土蔵にしまった。



写真 45 箕でさぶる



写真 46 竹漏斗を用いて俵詰め



写真 47 俵を担ぐ練習



写真 48 俵を担いで運ぶ



写真 49 田から俵を背負って帰る



写真 50 俵



写真 51 積み上げた米俵

⑩粃をネコブクに広げて乾燥

脱穀した粃を家の近くの乾田に広げて、天日で良く乾燥させた。絹さんの「ネコブク」という文章は次のような内容である。

「昔、ネコブクといって籾の2倍以上もある広いもので粃を1俵ずつ入れて干していた。うちは緒方でも1、2を競う米作りで、粃300俵ぐらい出来ていたので、干すのが大変だった。ネコブク40枚、近くの田に干していた。すればなおされるので、粃を出したり、なおしたりが大変だっ

た。1日に3回あせり反すのだが、そのたびにネコブクの四隅を引っ張り、中に粃を寄せて、またあせるから、一人ですれば1時間ぐらいかかった。冬中の大仕事だった。私はいつも、どうすれば少しでも速く済ませるかを工夫しながらネコブクを反していた。近所の人々の倍も干してあったが、同じくらいに終わっていた。毎日時間を見て、少しでも速く終わられるようにしていたから、面白くもあった。自分で自分にしていたから、きつくもなかった。」

ネコブクは細い藁縄で編んだ大型のムシロ（筵）のことである。普通のムシロは、経糸（縦糸）に藁の小縄を用い、緯糸（緯糸）として藁を用いたため、大きさに制限があった。ネコブクは縦糸も緯糸も小縄を用いるので、大きくすることができて丈夫ではあった。大きさは縦横9尺（約



写真 52 稲干しの農具を牛に負わせて田んぼへ



写真 53 ネコブクで粃を干す

2.7m) あった。大きい上に厚くて重く、取り扱いくかかった。使わない時には丸めて納屋の二階などで収納したが、ねずみの巣にならないように、捲いたネコブクの両端に杉の葉を挿しておいた。絹さんの家では、ネコブク 40 枚を田まで持って行って、粃を乾かしたのだから、その作業は大変だったに違いない。



写真 54 雨降りの夜、ネコブクを片付ける

⑩粃摺りと出荷

昔は粃のまま出荷していたが、大正期になると、ドウス（土臼）を2、3戸で共同で購入して、粃摺りをして玄米にするようになった。

土臼は木の薄板の隙間を赤土で固めて臼の目にした道具で、周囲を割り竹で編んであり、T字



写真 55 土臼で粃摺り



写真 56 米を弁選機（千石通）に入れる

形をしたヤリギ（遣り木）という把手を用いて3人掛かりで回転させていた。2人はヤリギを押ししたり引いたりして土臼を回転させ、1人は土臼近くに立って回転方向を同一になるようにしながら、粃を土臼に注ぎ込む役であった。昭和初期には発動機付きの粃摺機が使用されるようになっていた。俵入りの玄米を出荷する時などは、牛に負わせたり、馬車に載せたり、リアカーで運んだりした。



写真 57 俵詰め



写真 58 チキリ（竿秤）で米俵の重さを量る



写真 59 馬車で米俵を運ぶ



写真 60 牛に米俵を負わせて運ぶ



写真 61 米俵を載せたリアカーを牛に曳かせる



写真 62 土蔵に米俵を納める

⑳ 精米

自家消費用の米は、土間などに設置していた唐臼や近くの精米水車（サッコンタ）で精米をしていた。



写真 63 サッコンタ（水車）で精米

㉑ わら小積み

脱穀された稲藁は、牛などの敷き藁や手工品にするため、ワラコヅミ（藁小積み）といって田の片隅に積み上げて保存した。子供たちが遊んだり、カラスが止まっていたり、それは晩秋から冬にかけての風物詩でもあった。



写真 64 わら小積み



写真 65 わら小積みとカラス



写真 66 わら小積みとカラス



写真 67 わら小積みを跳ぶ子供たち

㉒ 麦作
乾
田では二毛作

の裏作として麦類を栽培していた。ムギと呼ばれる裸麦を主に栽培し、他に小麦も栽培した。裸麦は米と混ぜて麦飯にして食べたり換金していた。小麦は団子汁やうどんなどの粉食としてほとんど自家消費していた。



写真 68 天秤棒で下肥運び



写真 69 下肥運び

稲

扱き後、牛に犁を牽かせて田スキをした。土を耕起して堆肥をスキ込むのである。たくさんの堆肥や下肥を田に入れた。寒のひどい時には、稲扱き前に麦田起こしをすることもあった。

絹さんの「麦植えの堆肥運び」には次のような記述がある。

「麦植えには堆肥がたくさんいるのです。堆肥に麦の種や肥料を混ぜて植えるので、堆肥がたくさんいるので、牛に負わせたりして行くのですが、1 km くらいの坂道をみんなは肩を替えながら行くのですが、私はまだ肩を替えることができないので、肩が痛くて泣きたい思いでした。でも牛はまだ可哀想でした。帰りはまた俵を負わされて坂道を登って帰る。

私は力が無くてきつかったので、口のきけない牛が可哀想で、いつも牛でなくて良かったと頑張るのでした。倒れるまで働かされて、出来なくなれば出される牛を思えば気の毒で、人間で良かったと感謝しながら頑張る私でした。」

麦を栽培すると、土地が痩せるといった。肥料分をたくさん吸い取るので、そのため、乾田のすべてで麦を栽培することはなかった。堆肥を田に牛で運ぶ専用の運搬用具もあった。ハタゴ（旅籠）といって、短い梯子状の木枠の両側には藁縄で編んだ網籠を吊った道具である。旅籠の底は抜けており、藁縄で縛って結んでいる。これを牛の荷鞍にはめ、網籠を左右に振り分け、その中に堆肥を入れ運んだのである。田の適当な間隔の所で網籠の底を縛っている藁縄を解き、その場に堆肥を落とすことができたので便利だった。

田スキをした後、田に水を入れずに、牛に牽かせた馬鋤で土を掻いて土を細かく砕いた。稲株が残っているので、平鋤を左右に払うように振って、稲株についた土や土塊を壊した。次に平畝を鋤で切ってゆく。畝の上部の平坦部を一尺二～五寸（36～45 cm）にした。溝をちゃんと掘って排水を良くしていないと、水分が多いと麦種が腐ってしまう。

畝の上面に種を蒔いて、溝部分の土を被せる。播種量は一反当たり三升ほどだった。種蒔きをしたら「上ぐれ打ち」をした。「ぐれ」とは土塊のことである。



写真 70 肥桶から柄杓で汲んで施肥



写真 71 牛が曳く犁で麦田を耕す



写真 72 クレ割り

絹さんの「麦田の上ぐれ打ち」では次のように記している。

「麦を植え終わると、乾いたら鋤でならして歩く。写真のように鋤を振りながら、地をならす。これはなかなか難しく、馴れるまでは足を切ったり、上手にならすことができないで、手にはマメがいっぱい出来る。この作業は、植えた麦によく土が被さっていなかったり、深くかぶったりしているのをならしてやり、また稲株も土がからんで大きいので叩いて小さくするのです。全部

を鍬でこのようにならすのですから、腰が痛い仕事でした。私は牛が怖かったので、こんな牛を引かずにする仕事の時は、きつくてもホッとする思いでした。」

播種後二週間経つと麦は発芽する。しかし、その頃は寒さで霜が降りる時期でもあり、土が凍って霜柱が立つので、麦の新芽を踏んで、新芽の根が浮かないようにした。12月から2月にかけて2回麦踏みをした。1月から3月末頃の春先の天気の良い日に、土入れ器に土をすくって載せ、土を麦の上に撒いていった。最初は軽く被せて2回目は多めに被せた。雑草の成長を止め、麦の間を広げて日当たりを良くするためであった。田植え前の6月初頭に麦刈りをした。稲と同様、稲刈り鎌で刈り取り、2~3日間直干しをした。稲小積みのように麦稈を田に積むことはせず、家に持ち帰った。麦も千歯で扱っていた。稲用の千歯は先端の尖った薄い鉄製の歯を並べていたが、麦千歯の歯は先端を細くした丸棒を並べていた。



写真 73 麦田の上ぐれ打ち



写真 74 麦田の稲株寄せ



写真 75 麦の種蒔き



写真 76 麦踏み



写真 77 麦打ち台で脱穀する



写真 78 千歯扱きで脱穀する

牛の飼育

緒方では農家は牛を飼っており、役畜として馬を飼うことはほとんどなかった。馬は馬車曳きやドンダビキ（土ん駄曳き）する人が飼っていた。ドンダビキは山で伐採した木材を曳き出す作業のことで、力の強い馬でなければ出来ない仕事であった。

牛は役畜として農家にとって欠くべからざる存在であった。運搬や田畑の耕作に用いられ、その糞尿から堆肥を作ることができたからである。牝牛はコツツイ、牝牛はウナメ、仔牛はベコと呼ばれていた。

戦前、大分県では、平野部が広くて1枚の水田面積が広い宇佐などで馬耕が盛んだったのを除けば、水田面積が狭い山間部などでは牛耕が主であった。馬は力は強いが小回りがきかず、牛は力こそ弱いけれども小回りがきいたので、小面積の水田では使いやすかったのである。そして、農家で飼われていた年取った牛を若い牛と交換したり、売り買いするのは、それぞれの地方にいた博労たちであった。

絹さん人形の展示室に「夏の田鋤き」という絹さんの書いた文章を記した解説パネルがある。絹さんの飼牛に対する思いが良くわかるので、その内容を次に紹介しよう。

「夏の5、6月頃の暑い日に、20アール（2反）もある田を鋤いていると、牛は泡を吹き出す。そして、しばらくすると、ぐだぐだと寝てしまう。若い牛や老の牛がこんなことになる。もう少しで終わるというのに、叩いても起きようとしな。主人は必死になって叩くけれど、私は可哀想で、自分もときどき倒れそうに苦しくなる時があるので、苦しいのはわかるけれど、主人なんかそのようなこともないのでわからないだろう。昼にもなるので、済まして帰りたいと思って叩くけれど、起きない。すると、主人は水を持ってきて耳に入れると、牛はすっと起きた。よほど嫌なことだろうと思いましたが、あの頃はあちこちで昼間になると寝る牛がいた。こんなになる牛はまもなく売るか、替えられるかされたものでした。人間もそんなにされるのでしたら、私も替えられていたかもしれない。私も初めは何も仕事ができなかったから、あの頃は機械もなく、牛と人とで仕事を全部していたのだから、牛も人間も倒れるまで働かなければならなかったのです。今考えただけでも、苦しく恐ろしくなる思いがする。でも、今、元気にこんな余生が送れるのも、その時の苦勞の賜物ではなからうか。」

この文章を読むと、牛と人だけで稲作という重労働をこなしていた時代のつらさが良くわかる。また、牛は暑さに弱い家畜である。牛は草とわずかな塩を与えていれば飼うことがでよう穀物を必要とせず、経済的な役畜でもあった。

牛には4つの胃袋があり、体重の15%を占めている。牛は消化しにくい草を消化するため、牛は食べた草を口に返して嚙んでは飲み込み、嚙んでは飲み込みを繰り返す反芻という行動をとる。第一から第三の胃までの過程では微生物が草を分解し、その成分が第四の胃でようやく消化されるのである。この微生物の活動などによって牛の胃は温度が高くなり、まるでお腹に大きな懐炉を持っているようなものであった。そのため牛は夏の暑さに弱い。

しかし、この文章から読み取れるのは、それだけではない。実は農家で働いていた牛は、ほとんどが牝牛だったのである。仔牛を産ませ、それを売ることによって、農家は現金収入を得ることができたのである。

夏の暑さと厳しい使役で、小さな牝牛が泡を吹いて倒れるのは当たり前だったのである。そんな牝牛たちを見て、絹さんは我が身と比べるのである。弱い牝牛たちへの絹さんの共感、体力のある夫へのささやかな反発も生み出しているが、絹さんの心優しさを良く伝えてくれる。また、

大変な重労働であった稲作に対する、絹さんの感謝の念には感服させられるものがある。

緒方町各地にタネヤ（種屋）と呼ばれる種牛を飼う家があり、繁殖期の牝牛を連れて行って種付けをしてもらっていた。生まれた仔牛は1年ほど育てて競りに出していた。牝牛は種牛として飼われるだけで、その数は少なかった。牝牛は体格も大きくて力も強く、牝牛とは比べものにならなかった。虚勢技術が日本に入ってきたのは明治中期で、それも最初は軍馬用に導入されたため、幕末から明治初年に日本に来た欧米人が、去勢されていない日本の牛馬を見て、その荒々しさに驚いたという。これでは牝牛を役畜として普通の農家が飼うのは難しい。

牛以外に比較的良く飼われていたのが山羊で、雌山羊から搾った乳を一度沸かして冷ましたものを滋養がつくといい飲んでいた。



写真 79 土ん駄曳きで丸太を曳く馬



写真 80 山羊の乳搾り

④牛の飼料

牛の飼料は主に草で、それに小麦のフスマ（麩）を付け加えていた。フスマは小麦を製粉する時に出る種皮などのくずである。それに味噌汁の残りなどを水に混ぜて与えたり、水に米糠とひとつまみの塩を混ぜて与え、牛に塩分を取らせた。春から夏かけては、朝草取りといって、田の



写真 81 青草取りで、おおこで青草を持ち帰る



写真 82 青草取りで、牛に青草を負わせる



写真 83 青草取り



写真 84 刈り干し切り

畔や草山などに生えている野草を刈ってきて牛の飼料にした。また、稲刈り後、晩秋には草山に行き、「刈り干し切り」といって野草を刈り取り、小積みにして乾燥させておいた。カルイで背負ったり、牛の背に負わせて家に持ち帰り、納屋や厩の2階で保管して、冬から初春までの牛の飼料にした。草が不足した時には藁を小さく刻んで食べさせることもあった。

㊤厩と堆肥

牛は母屋から離れた独立したウマヤ（厩）という草葺き屋根の建物で飼っていた。ウマヤは斜面近くに立てられ、二つに区切られていることが多い。片方は物置になっており、その下は「落とし小屋」といって、三方を石垣で築かれた頑丈な空間で、一方は外に向かって開け放たれ、堆肥を作る場所になっていた。ウマヤの片隅には落とし小屋に通じる穴が開けてあり、普段は蓋をしていた。ウマヤには寝藁を敷いていた。毎朝、牛の糞尿がついた寝藁を穴から落とし小屋に落とした。この糞尿混じりの藁に人糞尿や残り湯を足して発酵させて堆肥にした。発酵中の堆肥は高熱を出すので、時々切り返して、むらなく発酵するようにした。堆肥と共に良く発酵させた下肥を肥料として使うことも多かった。



写真 85 厩の牛の親子



写真 86 牛の仔を売って出す時



写真 87 落とし小屋で堆肥を切り返す

㊦わら細工

稲藁は牛の敷き藁などの他にさまざまな用途があった。俵やムシロ、カマス、草履に草鞋、縄などの、さまざまな藁細工に用いた。昔は茎が長い長稈種の稲があつてわら細工がしやすかったが、現在は台風などによる倒伏被害にあいにくい短稈種の稲ばかりになった。また、粳米の藁よりも糯米の藁の方がしなやかで光沢があり、藁細工に適していた。「わらすぐり」の人形では、女性が千歯扱きを用いて、稲のハカマと呼ばれる茎以外の部分を取り除き、茎だけになっている。次に藁打ち石の上に藁束を置いて、横槌でたたいて軟らかくする。「むしろ編み」の人形は、編み機の両側からムシロを編んでいる。「昔の家と縄ない」の人形では、母屋の軒先にトタン屋根を設け、その下で縄ない機で小縄をなっている光景を作り出している。また、「父のさんぶた踏

みを見ている私」は、俵の両端につける棧俵を父親が作っているのを絹さんが見ているという人形である。稲藁は農家では欠くことの出来ない貴重な資源だったのである。



写真 88 わらすぐり



写真 89 むしろ編み



写真 90 昔の家と縄ない



写真 91 父のさんぶた踏みを見ている私

⑦畑作

灌漑での配水などができない耕地は、畑や桑畑として用いられていた。畑では麦や唐芋を植えたが、粟を植えることもあった。畑仕事を直接表現する人形は見当たらないが、「粟畑の案山子」の人形は豊かに実った黄色く色づいた粟の穂を守る案山子の姿を良く表現している。弓矢を構えた案山子の表情は恐ろしげである。粟は排水の良い肥沃な土地を好み、根の張りは浅いが、乾燥に強く、山間部の畑でも栽培できた。春に畑を耕起した後、下肥などをしっかり施して平らに均し、遅霜がおさまった頃に種蒔きをする。雨の後や雨降りの前が種蒔きには最適で、3寸から5寸(9~15cm)間隔で棒の先で穴を開けてゆき、その穴に4、5粒ずつ種を蒔き、鍬で土を被せていく。成長してくると、草取りをしたり、土寄せをする。1尺(約30cm)ほどに伸びたら、列の間を鍬で耕して根元に土寄せし、高さが2尺(60cm)に近くなったら、再度土寄せをする。種蒔きして約百日で収穫できた。

山林の多い緒方では、カンノとかカンノウ(刈ん野)と呼ばれた焼畑が戦前まで盛んに行われていた。山を定期的に焼いて、蕎麦、粟、黍、小麦、里芋などを育てていた。山焼きでは、雑木を伐り倒して火をつけたが、倒した木を切って薪にして持ち帰ることも多かった。

唐芋(甘藷)も畑で栽培していた。その農作業の人形はないが、「芋切り」の人形がある。絹さんとお姉さんだろうか。木綿の短い着物を着た女の子2人が芋切り機を用いて、唐芋を薄切りにしている姿を表現している。唐芋は、種芋を植えて、伸びた茎を切って苗を作る。4月中旬に

畑を耕す。肥料分の少ない痩せて乾燥した土地で、日当たりと通気性の良い畑が栽培に適している。4月下旬頃、雨の後や雨が降りそうな時に苗を植えた。8月後半頃には収穫ができた。

大根などの野菜を栽培することもあった。「野菜を売りに」という人形は、割烹着を着た3人の主婦が、アーチの連なる石橋の上を大根やキャベツを載せたりアカーを押ししたり曳いたりしているものである。また、「野菜売りの私」という人形は、手拭いで頭を覆い、ズボンをはいてマフラー姿の絹さんが、四角くて大きな竹籠を両手で持って歩いている姿である。これから竹田の町まで行くのだろうか。

畑では麻を栽培することもあった。「麻こぎ」という人形は、石橋近くの小川で蒸した麻から剥ぎ取った表皮を川で洗って、粗皮をこそぎ落とす作業を表現している。そこに麦わら帽子を被った青年が弁当を持って来たというシチュエーションである。

畑の一部では茶の木を栽培していた。「お茶こしらえ 釜で茶葉を煎る」や「お茶こしらえ 煎った茶葉をもむ」の人形は、茶摘みをしてきた茶葉の加工を見事に表現している。野外の竈で大釜を用いて茶葉を熱している。母親だろうか、Y字形の木を両手に持って熱くなって湯気が立つ茶葉を掻き混ぜている。傍らには摘んだ茶葉を入れた背負い籠がある。父親は薪を運んでくるし、絹さん自身と思われる少女は両手で竹籠を持って、まさに煎った茶葉を受けようとしている。



写真 92 粟畑の案山子



写真 93 芋切り

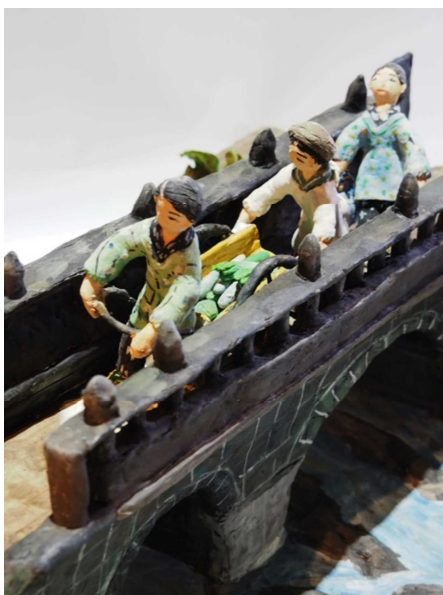


写真 94 野菜を売りに



写真 95 野菜を売りの私



写真 96 麻こぎ



写真 97 お茶こしらえ
釜で茶葉を煎る



写真 98 お茶こしらえ
釜で茶葉をもむ

⑳薪炭林

竈や囲炉裏を使っていた時代、薪は重要な燃料だった。「薪ひろい」の人形は、薪を縄で背負って家に帰る3人の女性を表現している。一緒にぶちの犬もしっぽを振りながらお伴している。

「炭焼き」の人形では4人の人物が作られている。炭窯の窯口から煤だらけの顔が見えることから、この窯は窯内消火法で黒炭を作る黒炭窯であることがわかる。土で築かれた炭窯の上に草葺きの簡素な三角屋根を葺いている。また窯口近くでカマスを立てている女性の姿がある。左側には木炭をカルイ(背負梯子)で運ぶ男性と木炭を入れたカマスを担い縄で背負っている女性の姿もある。これは窯外で木炭を立てる女性とカマスを担う女性は共に絹さん自身だと思われ、窯口から見える人とカルイで炭を運ぶ男性は絹さんの夫だろうと考えられる。伝統的な絵巻の「異時同画法」と同じ手法だろうか。とても面白い表現方法である。

里山では雑木林が薪炭林として維持されていた。薪も炭焼きもしなくなった昨今、里山は杉の植林をされたり、放置されてしまっている。



写真 99 薪ひろい



写真 100 炭焼き

㉑川での洗濯

川は灌漑だけが利用法ではなかった。「姉と一緒に川へ洗濯に」と「姉と共に川で洗濯」の人形を見ると、絹さんと姉さんの2人の少女が小川で洗濯をしていたことがわかる。決して楽ではない子供の仕事だが、お姉さんと一緒だったので、楽しそうである。昔話の桃太郎の「おばあさんは川へ洗濯に」という言葉を彷彿させる。電気洗濯機が普及した現在では考えられない洗濯法である。



写真 101 姉と一緒に川へ洗濯に



写真 102 姉と共に川で洗濯

③⑩屋根葺き

水田と共に家屋も景観を形作る要素のひとつである。絹さんの若かった頃、農家の屋根は草葺きだった。屋根葺きは専門の職人に任せるにしても、その前に家族や近所の人に手伝ってもらって、古い茅を屋根から下ろさなければならない。「屋根葺きの茅降ろし」の人形を見ると、竈と囲炉裏の煙で燻された茅は煤で真っ黒け。それを降ろす男たちも真っ黒け。「屋根葺きの昼食」の人形では、煤で真っ黒になった男たちが輪になってお昼ご飯を食べている。茅葺きの草屋根がなくなり、このような作業は見られなくなった。



写真 103 屋根葺きの茅降ろし



写真 104 屋根葺きの昼食

③⑪絹さん人形の現状と課題

絹さん人形は制作されて古いものでは28年、最後の作品でも16年経過している。段ボールを基台に紙粘土で造形し、水彩絵の具で色づけしている。人形は段ボールに接着剤と鉄製のネジで止めている。経年変化で、基台の段ボールが乾燥して反り返っているものも少なからずある。また鉄製のネジが錆びて膨らんだため、人形が壊れているものもある。樹脂含浸や錆びた鉄製ネジのステンレス製ネジへの交換、傷んだ部分の補修などの保存処理が必要な時期にきている。専門家のアドバイスを受けて早急に補修すべきではないだろうか。なぜなら、昔の暮らしをこれほど生き生きと伝えている資料は、大分県内には他にないからである。